



五月の節目録

△印ハ俳諧の
季と持りぬ

○養生の法○風雨の考○米の豊凶
○妙茶其外人家重法の事ハ所々
ハ数多ある故目錄よりある事

五月

卦 月支 調子
陰陽生 異名
初丁

芒種節

△梅雨
△夏至中

日令

此節ハ五月日の定りより事
好の事とあることある事

上如茂足揃

△松本祭

草薙尊

△菅簫興

五日節會

△左近真手番

騎射

△左近真手番
△右近真手番

端午男女衣服

△端午節
△重五
△真午

生花の式

△端午

日朔 日三 日四 日五



△菖蒲引 △永根
△菖蒲鬘 卅丁

△菖蒲酒 卅丁
△蘭湯 △菖蒲湯 卅丁

△菖蒲胃 △離懸の甲 卅丁

△穢 △せう甲 卅丁
△印地打 卅丁

△藥日 △製神麩 卅丁
△藥玉 卅丁

△長命縵 △結命縵 △躰兵縵
△備定 △五月王 卅丁

△藥草摘 △葉神 卅丁
△競祈 卅丁

△五月鏡 △百鏡鏡 卅丁
△神水 卅丁

△笹粽 △節粽 △錐粽 △秤鏡粽
△飾株 △菰粽 △九字粽 △芦粽 卅丁

△柏餅 卅丁
△射粉團 卅丁

退水神 卅丁
△桃印府 卅丁

△艾人 △伊人 △戴文虎 卅丁
△画天師 卅丁

△去鴿進舌 卅丁
△鳥糞 卅丁

△競渡 △鳥車 卅丁
△負端午文 卅丁

△加茂競馬 △さい馬 卅丁
△藤森祭 卅丁

△生流鑄馬 卅丁
△關明神祭 卅丁

△六日菖蒲 卅丁
△今宮祭 卅丁

△早治祭 卅丁
△植竹 卅丁

△室祭 卅丁
△今宮祭 卅丁

△面社祭 卅丁
△有無日 卅丁

△虎沢雨 卅丁
△佳吉御田植 卅丁

△山田御田扇 卅丁
△祇園に洗 卅丁

月令 此部は八日の定まりあり
五月五月の定まりあり

△最勝講 卅丁
△賑給 卅丁

△富士祭り 卅丁
△宮田植 卅丁

△瀑布 △麻布 △生布 △平 △半 卅丁
△さし賣 △さし 卅丁

日八廿

日三光

日八

日六

△半復生 草 △大原草 草

△繡草 △草の物 草 △草羽織 草

時令 此部より五月の時候

△五月雨 △梅雨 △はつり 草

△五月闇 草 △白く 草

草木 此部より五月の月の 草木のつらみあり

△樺花 草 △山樺子花 草

△柘榴花 草 △繡樹 草

△女貞 草 △南天花 草

△栗花 草 △杜鵑花 草

△要花 草 △合歡花 草

△柗花 草 △百合花 草

△車百合 草 △姫百合 草

△児百合 草 △唐百合 草

△袂百合 草 △鬼百合 草

△糸百合 草 △紫陽花 草

△紅花 草 △芙蓉花 草

△蜀葵 草 △錦葵 草

△龍葵 草 △萱草花 草

△下毛花 草 △金盞花 草

金錢花 草 △金銀花 草

△夏薺 草 △茴香 草

△時計草 草 △威天仙 草

鼠李 草 △美容柳 草

△酢漿草花 草 △蛇木子 草

△蕺菜花 草 △草石蠶 草

△接莖花 草 △天南星花 草

△苔花 草 △朝菊 草

△豌豆引 光亨 △蠶豆引 光亨

△花且見 光亨 △花昔蒲 光亨

△菖蒲 光亨 △雪下 光亨

△朝露州 光亨 △長根草 光亨

△救饑釣草 光亨 △玄及 光亨

△萍花 光亨 △藻花 光亨

△鐵線花 光亨 △榭子 光亨

△田植 光亨 △早乙女 光亨

△田歌 光亨 △田草取 光亨

△早苗 光亨 △菱花 光亨

△若竹 光亨 △竹品類 光亨

△艾刈 光亨 △真菰刈 光亨

△石菖 光亨 △和布刈 光亨

△海帶刈 光亨 △李子 光亨

△楊梅 光亨 △氣條桃 光亨

△無花菓 光亨 △天仙菓 光亨

△枇杷 光亨 △青梅 光亨

△杏子 光亨 △櫻桃 光亨

△桑實 光亨 △青小柚 光亨

△薑 光亨 △生胡桃 光亨

△早松茸 光亨 △茄子 光亨

△新茄子 光亨 △瓜花 光亨

△早瓜 光亨 △胡瓜 光亨

△姬瓜 光亨 △粟蔞 光亨

△稗蔞 光亨 △拒蔞 光亨

△胡麻蔞 光亨 △種植 光亨

生類

此部は五月一ヶ月の生類

△獸狩 ウシノコ 射 ウシノコ

△鹿子 カ 魚藻 イサ

△水雞 カ 黒鴨 カ

△水鳥巢 カ 諸鳥音 カ

△毛音鷹 カ 鶯の巢 カ

△蛆 カ 初蟬 カ

△小鯨 カ 蟹子 カ

△水馬 カ 蚊 カ

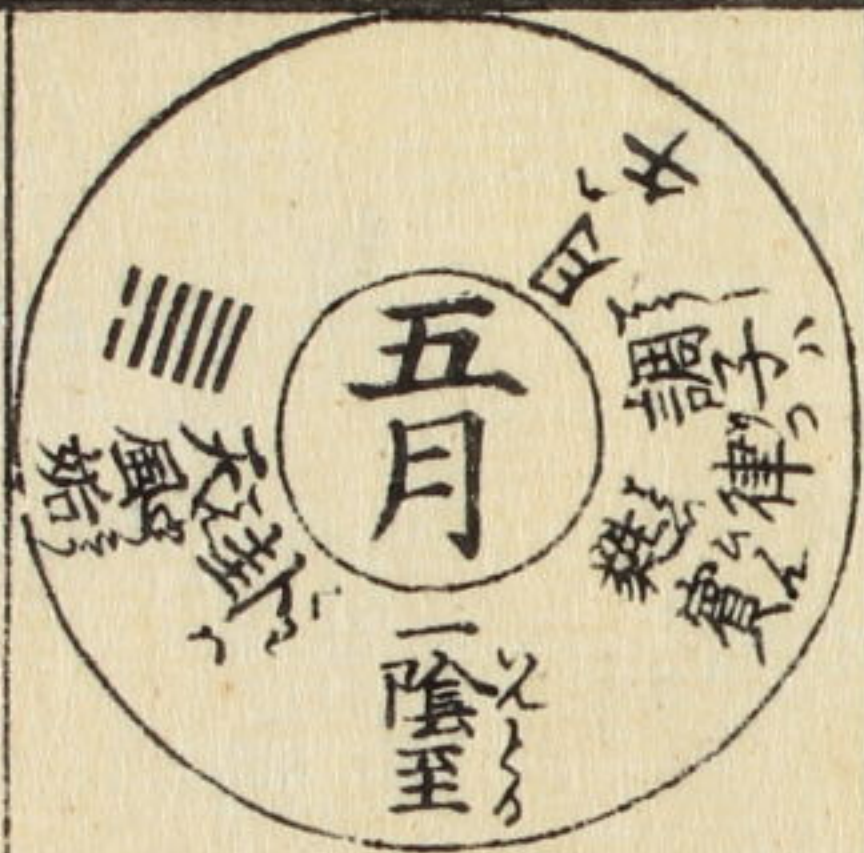
△蛇脱皮 カ 蟻 カ

五月 必用

此部は風雨の占。破軍の高方の日取の吉凶。他行の心得。作事の外重法のこと品々あつむ。右日の定り。華の下の令の部はあり。爰は日のごま。五月一ヶ月の西女用のうまにあつむ。

五月之部

△印の季を 持つりのあり



冬至は一陽 生る如く 夏至は又一 陰生るとん 陽極って 陰生する

○天風姤の女の莊んを卦に嫁 たりし不負のむらあり

異名 △仲夏 △蟬月 △泉月 南訛。蒲月。夏

五△夏半 盛夏 △糝實 △芒月 早苗月 かつろ月 △ひあいのろ月

たぐさ月 莫傳 吹去月 藏玉 たらとる月 △ささ月 △月を月

異名註 △仲夏ハ夏のあり 鶯月ハ月令ニ日

月令鶯首とつる故名づく鶯 首ハ星の名あり。南訛書經

平秩南訛とあり夏時物の
さうんふあり變化と云ふこと

○蒲月 蒲ハ昔蒲の事也。夏
五夏のたうを△夏半是も夏の

さうんふ 盛夏ふつ盛なり
△糞賓糞ハ下けて主入賓客之

陽氣上よきなるを陰氣主人と
ありて客と敬するの義なり即

ち五月の律なり。○早苗月ハ早
苗と云ふ月カレハカウ。○さ月

ささく月と畧云ふなり
⑤秘藏 さくも月

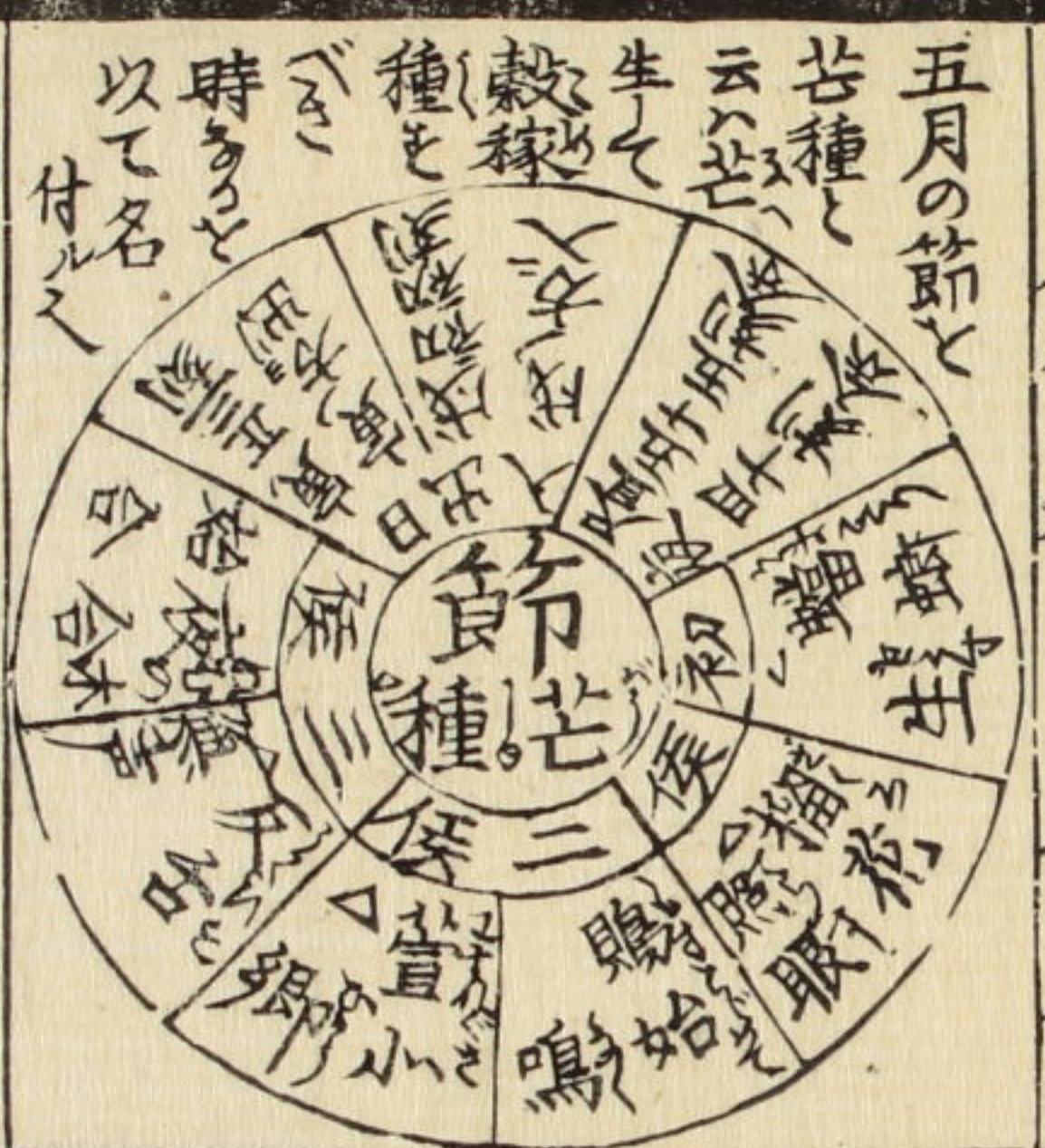
沁道ありはともほはとれあり
ちふかざつさくも月とて

藏玉 さくも月
ふ月面の晴るもさくも月とて

月さく月といふことあり
全 たらされ月

さくも月ハ搗月の名アリとて
あつむじのねいふことあり

節 △芒種七十二候。草木七十二候
○昼夜長短。日の出入等を記す



五月の節と
芒種と
云ハ芒
生て
穀稼
種と
時多と
以て名
付ル

○蠶婦くろくの氣陰カウ此月
一陰下カ生るるハ微陰の氣

感てく蠶婦が生るるハ此虫を
物又向ふ時ハワウとありて

○鷓鴣陰類物を移して害す
ふ鳥一陰の巳が好氣の生

くさ感して鳴るるハ反舌ハ
鷺さう是ハ春の始陽氣を
悦んで来り鳴く一陰の氣と
さけて音を入るハ利

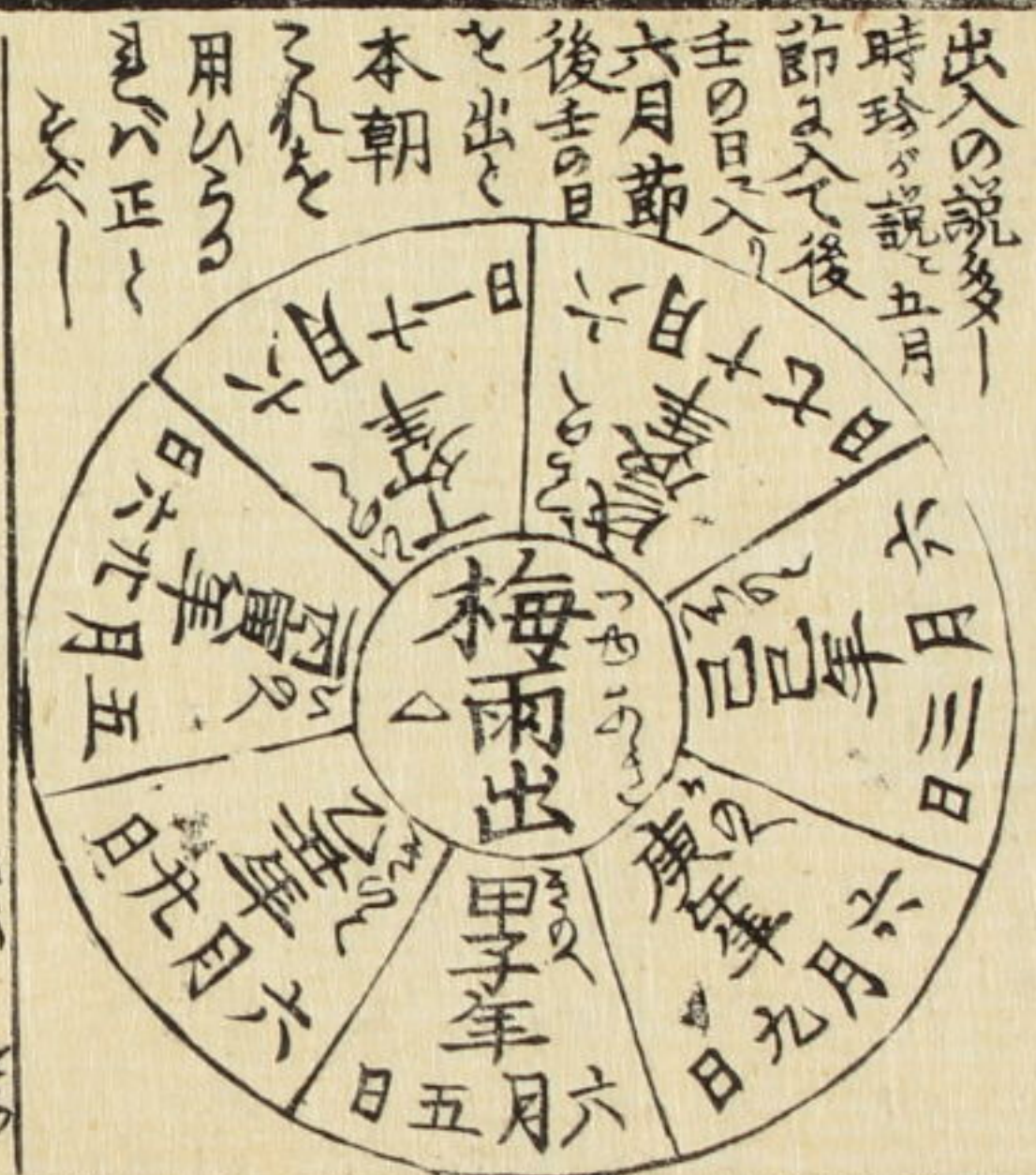
節台候 今日雷多し豊年
あり雨降ハ旱の

兆稲多し空一の芒種の雨一
寸重ハ梅雨一尺又當るといふ

是をそとふ此日雨ふまじハ
多くい旱の雨ありといふも多

かくハ○日中小一丈の竿を立て
景と測る四尺三寸五分ハ成す

梅雨出の説 次丸の内記
支那年のほ出



按さる五月梅まき黄と落
んとす柘榴の花ひきき栗の花

とら墓の子らまふ躍るの比
長雨あり是を梅雨といふ雨

甚ど多うすとつふもかうい
石ど入をり物くいと生ぞ雷鳴

を以て出梅す○京師鳥丸中
立賣下町のちまこ又大徳寺

門前の人家のじろ并又梅
雨の穴あり其時又至るハ水

る晴んとすれハ水くく○提
州丹生の山田栗花落理左衛門

宅は井あり徑三尺深サ一尺梅
雨は入て水必しく出梅の比水

梅 天気 梅雨ハ多く西風南
風と山の端と雲

多く風下れ時ハくど風るハ
空は雲多く天氣くくるとん

らう出ると是をくるとんて此
雨の内朝東風二三日はホて

吹ハ空も白くると是を船乗り風
といふ雨とくく○雨中とく

雷鳴を頻りに守然
くもも梅雨の内は雷が
鳴へ洪水と主は夜鳴り或は沖へ
入り入りのはまて宜う

新題林 重條

雨の色はくもも

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨の両景

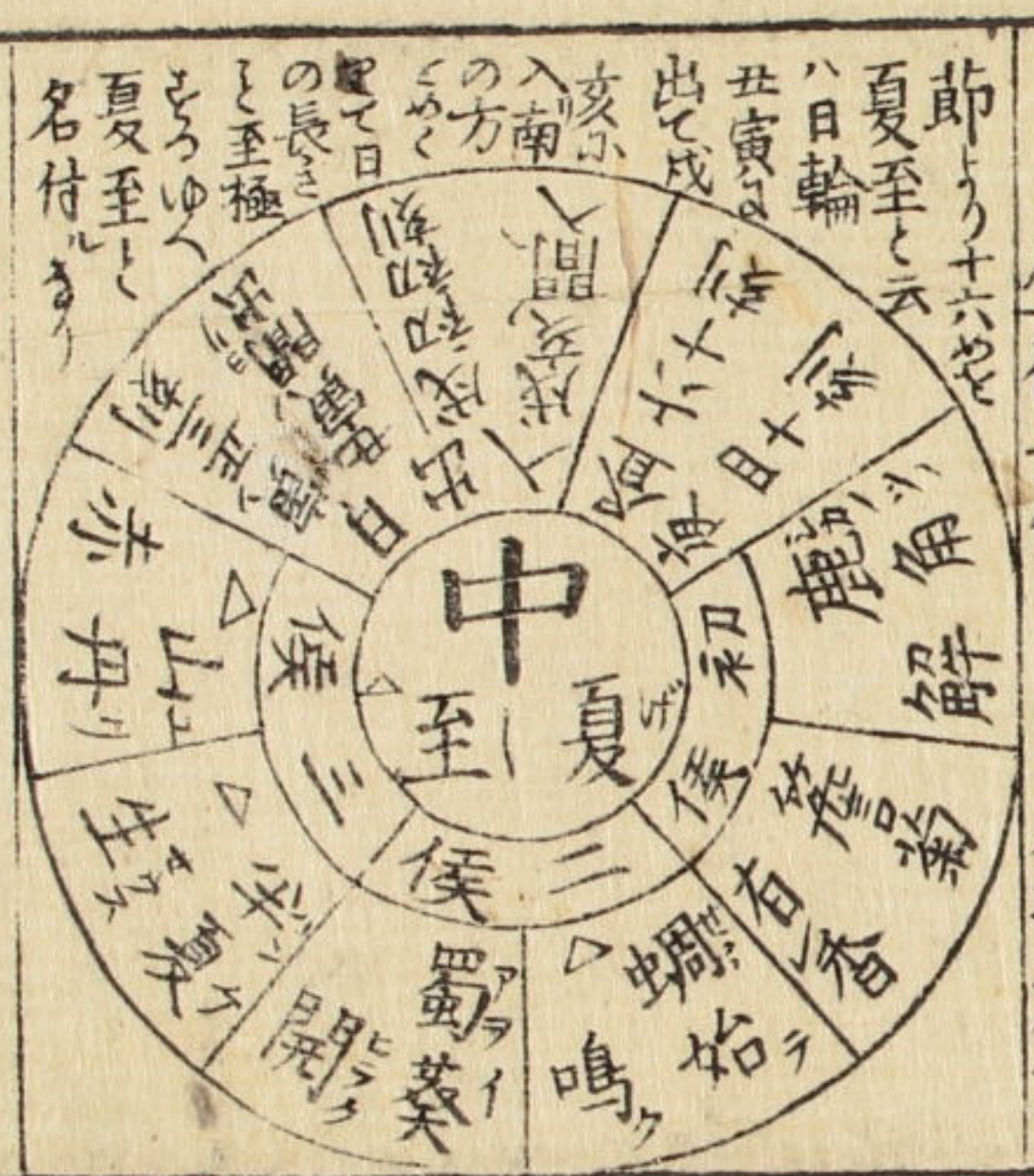
梅雨の両景

梅雨の両景

梅雨養生
梅雨中の湿を護
散らるる蒼木と

火は焼て煙とくべー雨湿を
病と生むる

中
夏至の七十二候
○昼夜長短の日の出入等左記



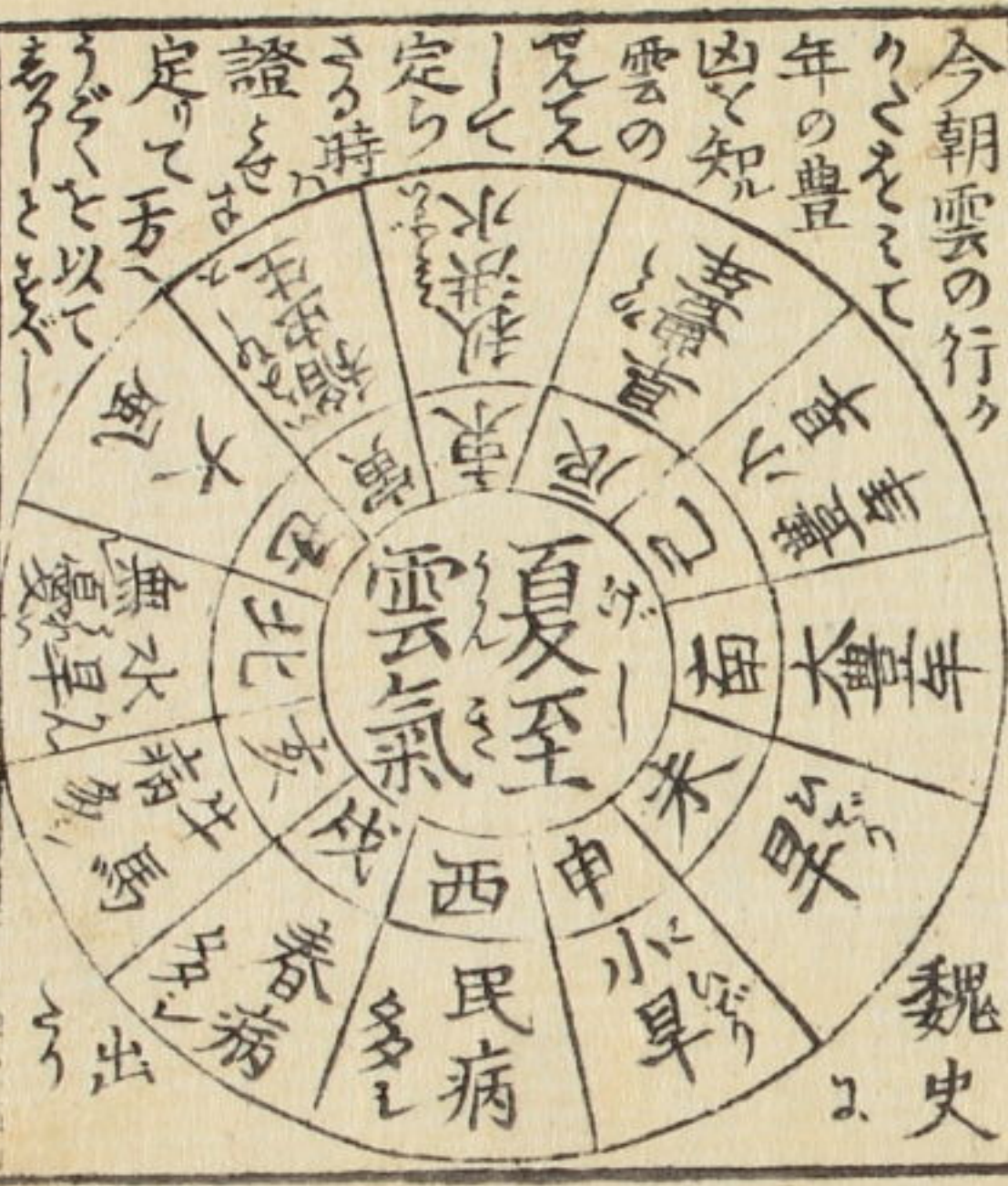
鹿の角はまて三ツあり左右合
せて六ツあり十月は一陽生
此月より六陽終り一陰生
氣の感して角と落を鹿の
六月めて生むるのく

ハセムル其声を聞く小人
の心とをぬく陰虫あり
微陰を感じて鳴る△蟬の初
声と云ふ○半夏の曆の時候
小も△半夏生と云うて種物
と云ふは古代より此前後を
以てゆる物多し其時を
らぐと生る草あり

夏至天氣占候 夏至の日

西南の風あれば六月小洪水あり
○晴天多きは六月暑氣アツク
早く○北風吹ば水さうりめで
夏中夕立多く米穀ゆとく
○夏至中旬ふきは豊年あり
下旬ふきは米價貴し○當日
雨らふは淋時といふ久雨と主る
さうりといふは小雨の宜しとす
○黒雲多き水難くす○日小
暈あまは洪水あり○雷鳴は

六月のころ甚し○午の時南
方小赤雲あるは五穀大ふま
る赤雲なく日月小光さくは
五穀ふまど人病多し



夏至養生 夏至の當日井とく

水を改まは瘧疫を瘡
む○夏至の日夫婦の交りをも
とぬ思ひ千金方又出るりの
月令に此日葺ふふく其外を
きりのを食せど淫欲を犯と
なすはくつ今日日の長き事極
る陰陽争天地死生かてり男

子齋戒して声色を止り騷事をなく
心氣を定め保養をなす日なり

日令 此部は五月十日の定
より事文の定方事と記す

天氣 今日晴天をいれ五穀
はよく育ちば五穀は

よかば雨をいれ大風を早
米價貴し北風は猶も悪し

東風半日吹は終
日吹米の價貴し

養生 今日
沐浴

これ無病
上賀茂足揃

して老い
近江 祭も

神平野大明神
松崎氷室祭

寺聖武帝
尊像開帳

今日晴
篠あり

天氣 今日晴
篠あり

今日内裏へ
奉ふ

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

近江 祭も

京 祭も

南都 眉
間

菖蒲輿 左右の近衛兵
衛の六府あり

免の輿と南殿の階に東西
は立又時の花をかりし

高 雄 虫 千 三
日 九 日 七

四 **菖蒲葺** 軒置とす

玉葉集 公雄
今日日とをあやめ斗とあやめ

形所のむつぎ起波
非 菖蒲とて

此頃よを盛夏より毒虫多
く生をふり軒は蓬菖蒲

をかきりもるも虫の入り
ぬまどあいや

蓬葺 是もあや
江 輪 三 祭

棟葺 俗ふせんえ
肉膳司

供早瓜 山城の御園より 供奉るなり

五不成 天氣 本朝米賈の 諺云四ヶ三

五ヶ五と云ふとあり四月三日
と今日との晴と以て豊凶と
定め價の高下とを晴と
豊年曇を凶年とをす

五日節會 天子武德殿より出
御さうて宴會

と行りし群臣は酒を賜ふこ
人々皆あやめのうぐさとかく
ふ典葉頭はくえと奉事
ありと公事根元より出

左近真手番 左近乃馬
場にて騎射

と事あり右近の馬場小
てい六日と是とひをりの日と
し今日近衛の隨身禰の尻
と引折てきるゆふひをりの

日と云ふ左近のあり手番は五月
三日右近は六日あり非人の受り
かゝるじたり

騎射 馬引
五月五日

豊楽院を昔の弓と御覽せ
とあり是と馬弓といふ

年中行事
ひとちねまゆと今やいん為盛

端午節 端五といひ初五といひ
が如し月い今年

五の始るる日い今月の五は始る
端といはれどもそぐめとも訓ず
或い五月五日ゆへ重五といふ又
午は月さるはより端午とも書え

一説に午いよりの五の字
と通用せともいふ

五日異名 重午 重五
端五 端陽

地臘 蒲節 解粽
天中 艾節 朱符

異名註

重午午の月昔の
午の日と用いられ

ハカサハルむまきり△重五
ハ五月五日さればあつ解粽

節ハちまほをとりぬみり
端陽ハ正陽ハ同じ。地臘ハ

一陰生じりたり其外の異名
文字のよきいありてころる

艾節ハ昔日蓬を作る虎を門掛
けく邪氣を拂ふ也ハ

端衣服

今日より帷子を着
袴とる色又浅黄

女衣服

女もひとへのさ
のひびびり

上鞠ハまじりのあせうらさ
あそまじりの色筋をうらさを

めととく節句ハ花あやめのも
やうやう或ハひびびり

生花之式正

菖蒲花菖蒲
石竹蓬

菖蒲引

菖蒲引
新勅 前関白

深さのほまきふあつらあやめ
年の終るうたき道はひく

夫木 寄菖蒲祝 為相
君代ハあつらあやめをうけの

夫木 江中菖蒲 仲正
あやめまひくとやあつらあやめ

夫木 江中菖蒲 仲正
あやめまひくとやあつらあやめ

夫木 江中菖蒲 仲正
あやめまひくとやあつらあやめ

詩 菖蒲五字對句

揮鎌若轉月 緑成玉床蓆

拂水生連珠 頰兼清夜娛

永根 哥よあやめかた根
しよむらり永承六年

五月五日ふあめめの根合しつみ
くあじしう著問集又出さう

夫木と根の花はけいけん
くへやまもあひをうるらん俊頼

菖蒲髪 聖武帝の時、初
△日本紀又出さう

菖蒲案 菖蒲生梳を黒木
の案にて奉ることあり

菖蒲枕 夫木 俊頼
△床はうへあやめの

はくしやくまそれそく
ぞよよのふりくさ **菖蒲**

帷子 △菖蒲浴衣のひか
⊕⊖のほも上まあやちを○

菖蒲帯 棟佩 菖蒲
携を

どつて帯物とするし悪氣と
辟るくと證類本艸の出づ俗云

せんごの木といふものあり
⊕⊖棟佩てつとやまは者嵐雲

菖蒲酒 石菖と切て酒小
たして是とのい雄

黄を少くをうりてまじく
より一切の邪氣をとらる ⊕⊖

不血や箸の下さる **蘭湯** 蘭
菖蒲酒家定

湯に入てゆあをすらすと
大戴礼に見へり

菖蒲湯 百病の菖蒲の万病と
治とるふら蘭湯を

どの故事よりおころるるべし
⊕⊖湯あてもふをる菖蒲道

菖蒲刀 いあへ菖蒲と
りうてかざる今木

刀のさうを菖蒲づらうしとふ
⊕⊖を刀のかりにさるる移竹

菖蒲曹 △削懸の甲
是も菖蒲之飴

幟 △飾甲○此日幟甲を
事ハ光仁帝の時蒙古の

賊来る早良親王討手とて出陣あり親王伏見の

森社に祈る時小五月五日忽ち風吹て戦いどしと勝事を得

今日武事とあるは戯を事

と事類書纂要に出る自

然も此月武備とあるは和漢

習合せいなるべし

非 瘡癩の症とあるは其角

女は子にのみあつたのり小律人

狂 忍びを獲失いやふふの先み

網もよとる紙の海うる 紅雪

印地打 童の小弓と持て戯

ころし印地とほはの跡の地付て

印地とくるふよりて名付るん

非 ぞへ人ふわし茶地のそつて嵐雪

舞出てたも吹たり印地を 移竹

薬日

新撰六帖 貫之

先茶糸そんより日たちうとける

今日と茶日といふは茶草と取

或は九散と調合とるふより中に

も今日制とる茶を記す

紫金錠 諸毒と解腫物と

滑し毒虫ととる神方あり

五倍子 大戟 續髓子 十枚

鹿射香 五枚 右細末して九じ其外

豊心丹 固本丹 延齡丹 反魂丹等

とて今日調合とるをよりとす

薬玉

或は神麴 今日製と

夫木 中宮上総

あふとくともりたあまをふへ

今日茶草と五色の糸とてとく

のく臂ふかきまの悪氣を拂ふ

長命綵續命綵辟兵綵風俗通條葉

皆茶玉の事さる五月五日の神玉

非茶玉と云ふを疑ふ所の神玉立

詩 續命綵之詞 萬楚

西施謾道浣春紗 西施ハ吳美人ナリ

流紋石ハ碧玉今時閩麗華 故事ナリ

碧玉モ春秋ノ時ノ美婦之眉黛 器量ヲクラベアラフツ

奪將萱州色ナルハ草ノ碧尤

ヨリハ色 紅裙妬殺石榴花

モスツノ紅イナルハ花ノウルハシク 見事ナルヲ子タムバカリナリ

新歌一曲令人豔 嚕ヲウ

ツラシク人々ノ心モ 醉舞雙眸

ウキタツバカリナリ 斂髻斜 酒ニ酔テ舞ノ袖ヲカ

クミ 誰道五絲能續命 余カ

シカラ五絲續命ノ故事ヲ イヒツタヘレ正コノ故ハ見テ

却令今日以君家 其美藤

イヲ失ヒ死セント 思フバカリナリ

藥草摘 今日採をば

て製 競川 是も百草をば

事ニ或ハ競 馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

馬競狩茶獵とも云

五月鏡 玉葉 為家

五月鏡 玉葉 為家

浴のりす鏡々々(百練) かのやうのり知らん

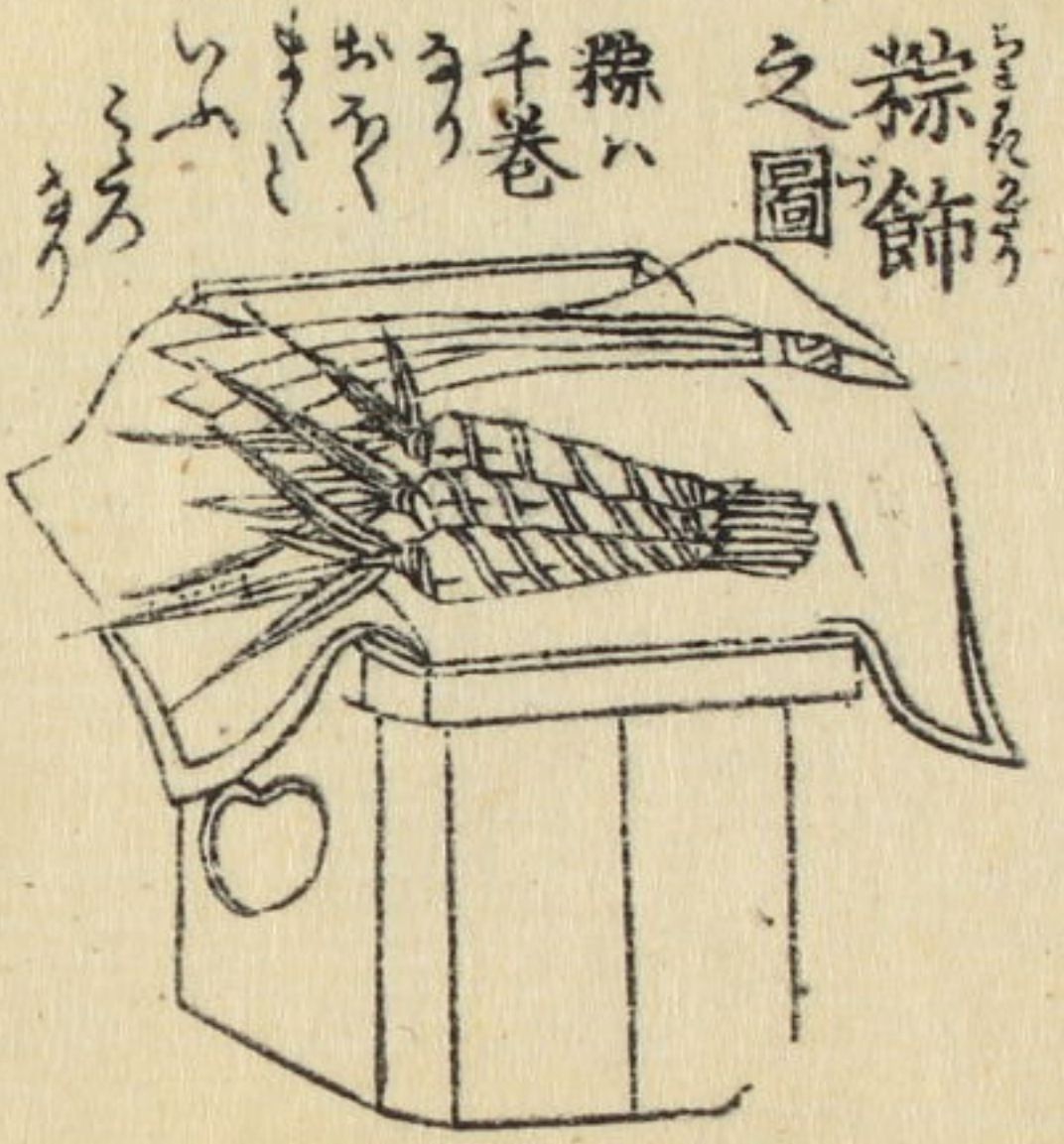
鑑 今日午の時楊子江にて鏡を百をびてて明鏡を

鑄りて事文類聚に出づ是を以て本朝哥ふも詠する

粽 異角黍 錐粽 秤錘粽 炙粽 九子粽 角粽

金廬粽 笹粽 餡粽 飾粽 菰粽 伊勢地

粽飾 之圖



柏餅 ひうらの葉の葉は けりやう 柏も神道

小用ゆめめをたれりかふれが ちらゆるなる座しーとべさめ

今日のかざり月の毒邪を拂ふ ため夏ハ毒虫多く人の家小

も入り来りにより 粽ハ蛇の形小 表と是を食すは彼を降伏

とる心して夏の中ワごころふ 事と表して説きとるべし

俳多きぬ女は粽をさうの 鬼貫 ちのたやうつまをのぢは粽 其角

狂者ふふとれれよは赤令の 粽もハふたも粽をば 行安

詩 糍之詞 唐順之

南薰應律轉宋旗 五月八午 二属レ南

方ラ主ル 火帝業離錦席披 色赤シ

夏ハ火應レテ神ヲ火帝トス易 ニテハ離ノ卦ニアタリテクワ兼ニ坐

席ヲ榴吐千花承羽蓋クガ カザル 莫開五葉拂

口ノ花ノ紅キヌ ガサニ映メ美シ

瑶墀ヨウチ 堯ノ時莫英アリ下月ニ

瑤墀ハタマシクニワ 承盤セウパン 錯出サツシュツ

仙人掌セニンテウ 天ノ甘露ヲ承盛ル器之

織女オリメ 故事ヲ用 復道フクダウ 龍舟リウシュウ

方競渡カタキワタリ 此日蛟龍舟ヲサヘ

街恩更許向昆池ケイオンミヤクサウケンチ 天子ノ恩

蛟食芳辰カウシヤウチン 羅ラ 没ボツ 後ゴ

五色の糸を以て茅をほくそ

の始り之委しく本篇

博物全に見へり

射粉セウコン

團ダン 世又宮中にて團子と作

是と射めて食らる事天寶

遺事ウイジ 退水神タイスイカミ 唐士高

小沉コシヅメ 其熟水神ミツカミ 多りて人

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

を以て海に入れば則ち五色の

戴艾虎 唐土にて艾虎を虎

る小虎を色々此糸にて作り

艾の葉又つけ頭かひのまき

邪氣と云ふ画天師 張天師

の像を 画はかき又至くと作り艾と

毒氣をこころといふ本朝 去

元三大師の御影と云ふ如

鴿舌 零陵記又鴿舌一

舌の尖を舌れがよく物つひ

あまやうるると 鸚鵡と過う

梟は美 けりのあがりのものと百言ふ

賜へし漢書ふ出うり 立競

渡 今野車永馬 風原洞羅

志つきて失ぬこれをすふ

水馬ともいふ越人船を

車といひ楫を馬といふ

状賀端午文 左の尺廣

即漢文云

端午之日 祝規

目かたを ま路の 仍も

堪 餽 賞 スルニ 更ニ

此 蔡 末 帷子 一重

不顧不腴 薄 縹

粽一折 每例と云

楚粽 從テ例ニ 以テ

を 後ハ 朱久ら 知納

軟 鞞 ス 希テ 契テ 而

以 希 以 希 以 希

留之ヲ 幸甚

留之ヲ 幸甚

尺牘 上中下各替

平日祝規 ①天中佳節 ②端

午之定秩 ③五綵糸節浴蘭

節正屆 堪歡賞 ④多壽万

福 ⑤壽詞何盡 更欣躍 ⑥

多快欣々多々 更不顧不腆

⑦不憚輕儀 ⑧不羞菲薄 ⑨

無論鄙品 薄飾 輕帷單衣

楚粽 角粽 黍粽 菰葉粽 從

例 ⑩謹因舊規以奉獻 ⑪

逐儀例 獻納 ⑫菲儀以投

希笑云々 冀笑存鑒我荊

曝 ⑬惟鑒納為幸 ⑭請願

留

狀 同報答 左尺牘 漢文ナリ

涉仗時文 妙年 為佳客

辱使 傳蒲節之 詩辰

足事之 他者 一好 俾 佳日

送 鮮美 嘉魚 以

結 據 衣 境 人 祝 多 無 涉 云

錦 塊 莊 肅 偶 人 與 豎 童

少 親 情 以 展 示 孝 之 意 納

蒙 簡 厚 賜 誌

仕 以 控 約 老 教 之 札 下 亦 々

拜 謝 期 多 日

尺牘 上中下各替

辱使 來使 傳命 ①勞費介

蒙使 命 ②恭承 顧命 傳蒲

節 々 ③賀端 陽之 辰 ④祝

綵縷佳節 ⑤ 尚令辰 送鮮

美云 ⑤ 錦鱗下賜 ④ 珍魚

芳惠 ⑥ 惠嘉魚 錦兜莊麗

⑤ 玉飾奇偶 ④ 綺羅金人

與豎童附小子 ④ 授豚兒

蒙箇厚貺 辱賜數品 更授

多儀 叨蒙分惠 拜謝云々

對使拜喜相逢 以謝之拜

受無顏 暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術 花を盛て 今日眼を洗ひその

まゝ是を棄るゝとてしよ小汝我

病を代とて唱へて治る事

妙なりと養生雜記に云るなり

治淋病 首蒲根を取細末して

たしちを置阿膠と等分合して

用の兩三度用いて治む 治久痢

今日鯉の枕骨を異焼めてたし

ちを置くべし久く止りかひる

痢病を治すて其効神の云々

不病痢病 今日へびのちを取

朝露をわて置一ツ水とて吞ぶその

年痢病のやど流行てもうつ

ぬと妙に衣服虫をぬる法 今

日昔の葉ととりて櫃箱の中へ

入置バサのづらへ虫を生せざるなり

蠅のつらざる呪 白雲のつらざる

蠅のつらざるをぬめておろしそ

をれとて此哥と三返唱へ白乃

字と四方の柱を逆さる小張り又

岡とつらざる棟をとも天井こそ

も真中にとりて但しつらざるも文

字とかく紙一才四方真四角を切

てかくべし今日れ午の刻ふ此法

の如くめでおせば其年中家内

小蠅のつらざる 辟疫術 今日午の

刻石首を揉て晒し乾し末と

藪の下へ放置けハ登長くとも
ず蚊を辟る咒 今日午刻儀方

の二字と書きて家内の柱の中へ
まどに粘ハ蚊をころ又酒と蜜の
葉にそぎて座の四方の隅ハ挿
セハ蚊も其條はすかりとる

又法 今日午刻燈心を油の内へ
浸し日輪をひいて天上の金雞

蚊子腦髓の液を喫ると右の咒
文をと返唱へ念し終りて太陽の

氣を吸て燈心の上へ息を吹こ
夜今この燈心は火を点とれば蚊

こくを去る 又法 今日浮萍を
とり陰乾めて細末を樟腦を

加へて拌せ彈子の大小丸ドて
毎晩の蚊を火くして焚ハ家内

の蚊こくを水とる 物覚るこ
人ハ物忘れこそ又法 今日龍の爪

を衣服の縫の中へ入置ハ物忘れ
やむ夫婦中惡とて和順する術

今日鳴鳩の足は骨とくして絳の
袋ハ入男の左の手女の右の手はけ

置べし又常々 京 賀正競馬
袂ハ入とくは

ひ馬。赤方黒方として左右のつ
かいて馬くくべとるなり

非 けるる人マあやみはる上は實
在 一ツさふか布なるくくへる

まくとさふあも坊令儀足 負辨
△北藤江森祭。ひ馬あり此祭の古

実ハ幟甲の下へ 大坂 生玉や馬
記

堂法事 大和 天神 近江 関
日の刻 音曲

神祭○三井寺南院祭神輿出御
○大津高山寺貴船祭

六日 菖蒲 夫木 衣母大官
あやめまむくく人もるをあやめ

非 六日菖蒲の節ハ菖蒲外格文

六日菖蒲 夫木 衣母大官

あやめまむくく人もるをあやめ

日七 京 今宮祭 八 御出 山城 一字治祭

申日 陸奥 相馬中村野寺 妙現大祭 三 不成 就日

栽竹 龍生の節 又竹醉日 日 竹迷日 今日竹と移

植 能活て繁茂 日 今日竹と移

播磨 室明 五十 神祭 京 今宮祭 紫野

是と執行と下松と云々御 藤所 廿九日 有 江戸 黒

不動地主早尾 大権現神事 和泉 塚天 神祭 京

永觀堂大般若轉讀 百萬遍念珠出 大坂 天

寺大般若 丹後 九世 龍燈 九月五日 大

坂 天王寺金堂 本尊秘法刻 日 八十 京 今宮御 興洗

上御靈 廿 不成 日 二 廿 大坂 天王 寺太

大般若 日 一 就日 日 三 京 清水田村 延

子堂法事 日 三 音樂午刻 日 五 江 坂本 有魚日 村上 天皇

江 坂本 社祭 日 五 有魚日 村上 天皇

の御國忌之依に今日禁裏不 政事 然急用 行

有魚と云 江戸 揚弓結 虎

淚雨 今日曾我祐成討 日 多 其妻虎愁傷

只今日雨を虎が涙と云之 排 中 虎が雨移竹

狂 秋 虎の別と云 虎が雨移竹 日 未得

京 下京中道寺祭 江戸 芝居

祭 江戸初芝居 曾我 物語 此報息 今日法

樂の哥舞妓とさるる。白銀路鷺は森神明祭。目黒不動

泰○薬研 大坂 △住吉御田植 今日本

乳守の遊女御田とさる事。宮女悪瘡の愁ありて宮中

と出て乳守ニさる。此病に住吉の神といのるあるありて神託

と諸人ニ面とさる。いやいよとさるるすべしとさる。いよいよと

女とさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよと

とさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよと

とさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよと

とさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよと

とさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよとさる。いよいよと

伊勢 山田御田扇。官司より扇を出てきたりて事

常の扇よりい少く大さく内宮の扇は骨七本外宮の扇の骨は六

本槍とてつら松の画とて惠比須の鯛とつら上り墨繪の板

行ある藤々一と物とて社人ありて此扇を持て舞うとて

御師より遠近の諸邸家へ送らる恒例ありこのあまの風

あたまの邪氣を除き田圃と作る者能みくは年ほとひつと

晦京 祇園神輿洗。ことひそく一基四条宮川のちと

ありあひいひその義式をその役者おのが家々の挑灯を

とがさせてとて守護一奉る

いと真ある見物と和泉 堺方違明神祭

月令

此部より五月一ヶ月日の定まらざる事あり

最勝講

東大寺。真福寺。延暦寺。園城寺の僧と

講師して清涼殿に講せらるる

百歳や五月の山はあまくい

いづれいづれも家君のくさ

ついで草小御講の賑給

はるゝと民ふ米塩など給ふ事

年中行司 嗣長朝臣

何れいづれ民のまゝと

くさるるを君やくらん

富士垢離 来月と旬より

登山と尤百日浴水潔齋と

但江州の人七日精進して登る

伊勢 内宮外宮御田植

たまりまゝ大神事

て長官車をいざー

規式とみるに多し

△生布△半まじ△木平

△麻布△布まじと

あゝば雑布ともあり

いづれいづれ細の

妹がさくせり子作り乃布

晒賣 排接町へ

半夏生

五月中より十一日めり此は

半夏生どろどろといふ

大原

丹波國大原の社へ

三日参詣とて春さりと云九月

締

薄物 花 古代

帷子

の 漆色（ぬりいろ）としう寛正六年 燕照
院殿大追物御見物の時射手の
糞束（ふんぐわ）の白花の白帷（しろかたびら）を着（き）て
是（こゝ）以（て）考（ま）まの漆色（ぬりいろ）も定（さだ）ま
（其年 漆色）

狂（くる）意（い）とてふ（と）う（う）帷（かたびら）子（こ）は（は）あ（あ）ら（ら）か
ひ（ひ）と（と）こ（こ）そ（そ）ひ（ひ）深（ふか）い（い）ふ（ふ） 久清

非（ひ）米（まい）ま（ま）く（く）嵐（あらし）よ（よ）い（い）ふ（ふ） 薄
暎（かげ）や（や）つ（つ）か（か）花（はな）枝（えだ） 單羽織（ひとばやし）
（薄）

非（ひ）の（の）ぢ（ぢ）う（う）う（う）風（かぜ）と（と）あ（あ）ま（ま）す（す）や（や）高（たか）羽織（はねおし）玉（たま）芝
（みづうら）む（む）一（ひと）ま（ま）お（お）織（お）も（も）浮（う）せ（せ）其（その）角（かく）

時令 此部より五月の時候
よ（よ）か（か）う（う）事（こと）と（と）あ（あ）つ（つ）む

五月雨 （ついで）梅雨（はるなづき）黄梅雨（はるなづき） 梅雨（はるなづき） 梅雨（はるなづき）
（さ）さ（さ）と（と）ま（ま）さ（さ）と（と）ど（ど）れ（れ）の（の）五（ご）月（げつ）雨（あめ）

クダルの畧（りやく）を（を）り（り）△（さ）さ（さ）つ（つ）と（と）雨（あめ）の（の）ま（ま）ぢ
と（と）と（と）た（た）れ（れ）や（や）ら（ら）ぬ（ぬ）り（り）の（の）か（か）り（り）

新亭 藤原定家朝臣
玉（たま）祥（さむら）の（の）乃（の）初（はつ）人（ひと）の（の）い（い）ろ（ろ）つ（つ）あ（あ）ま（ま）と（と）
ん（ん）あ（あ）へ（へ）て（て）や（や）ど（ど）ろ（ろ）る（る）五（ご）月（げつ）ぬ（ぬ）の（の）を（を）

家集 河五月雨 信実

五月ぬふつそら川をたゞとせ
あ（あ）ら（ら）ま（ま）い（い）つ（つ）こ（こ）せ（せ）の（の）む（む）り（り）ま（ま）ま（ま）

家集 山家五月雨 雅有
あ（あ）い（い）と（と）ふ（ふ）と（と）朝（あ）の（の）な（な）れ（れ）竹（たけ）枝（えだ）見（み）て
い（い）ら（ら）と（と）せ（せ）あ（あ）を（を）と（と）水（みづ）た（た）ぬ（ぬ）り（り）ぬ（ぬ）

續古 海辺五月雨 家隆
か（か）り（り）く（く）ふ（ふ）塩（しほ）吸（ひ）ぬ（ぬ）ゆ（ゆ）い（い）海（うみ）士（し）人（ひと）の（の）
神（かみ）や（や）な（な）さ（さ）く（く）ん（ん）さ（さ）み（み）く（く）ま（ま）れ（れ）後

千載 仲細
は（は）み（み）く（く）れ（れ）い（い）と（と）ぬ（ぬ）の（の）末（すえ）に（に）神（かみ）あ（あ）ま（ま）て
あ（あ）の（の）塩（しほ）と（と）け（け）乃（の）波（なみ）の（の）浮（う）き（き）や

御集 江五月雨 後九条内大臣
五月ぬれくさくさうねの江の
ゆ（ゆ）と（と）あ（あ）の（の）さ（さ）の（の）ひ（ひ）ま（ま）あ（あ）う（う）ん

夫木 五月雨有餘 右衛門
五月雨のちかまらさけ水あふ
た（た）ま（ま）た（た）あ（あ）つ（つ）う（う）な（な）り（り）も（も）と（と）

詞 日ぬるもきく身月とさみ
ま（ま）ま（ま）ら（ら）死（し）月（つき）の（の）初（はつ）米（まい）も（も）う（う）ぬ（ぬ）水
ほ（ほ）と（と）ら（ら）朝（あ）の（の）け（け）ら（ら）松（まつ）な（な）あ（あ）ら（ら）く（く）ん

ぬ（ぬ）山（やま）川（がは）の（の）敷（しき）も（も）ま（ま）ぬ（ぬ）も（も）ま（ま）と（と）

五月雨

つる。いさかふるを。朝のやちもさき
さき。いさかふるを。あそくぎ。あひ
系。同。入。の。を。と。ふ。さ。う。り。ま。め
る。五月。あ。ま。人。も。こ。ひ。こ。ぬ。

連。五月。あ。ま。の。か。れ。後。乃。宿。家。春
五月。あ。ま。の。か。れ。後。乃。宿。家。春
五月。あ。ま。の。か。れ。後。乃。宿。家。春
五月。あ。ま。の。か。れ。後。乃。宿。家。春
五月。あ。ま。の。か。れ。後。乃。宿。家。春

五月間

竹系や秋の
あふさるる園我自

詩 五月間五字對句同上

海霧連南極 蓮渚千峰靜

江雲暗北津 梅天一雨清

帆開青草湖 中夜夏亦寒

驚風乱貼芙蓉水 五月寒

密雨斜侵薜荔墙 已生霓

白露

黒々

草木

糶花

新古今

夫木

家隆

あふさるる園我自

竹系や秋の

あふさるる園我自

竹系や秋の

あふさるる園我自

竹系や秋の

あふさるる園我自

竹系や秋の

あふさるる園我自


竹系や秋の

あふさるる園我自

竹系や秋の

あふさるる園我自

詞かやうとくもく。家の介面
ふれふるとし。紫雲ふまぐん
吹風ふあふ。ふらこののち。ふ
こあ。を。ま。上。小。舟。何。を。夕
月。教。ま。れ。ぬ。る。ま。た。ま。り。
加。茂。小。舟。

連橋ふもむき。あち小春
あち咲むの梢やまの枝。絶巴
山。梔。子。花。  木。丹。 越。桃。

詞いよぬ。さ。え。ぬ。い。う。さ。り。の
連。ら。ま。の。た。の。の。あ。り。せ。し。 新撰
筑波
排。ち。ほ。の。さ。ら。あ。う。り。外。 元隣
狂。は。く。と。日。を。ま。ら。ま。あ。や
ら。ま。の。味。 古来
の。深。飯。光。廣。卿。 石。榴。花。 古来
石。榴。三。種。あり。本。紅。千。葉。白。千。葉
黄色。千。葉。かり。由。世。桃。色。あり
かりて。珍。ら。く。愛。と。べ。い。
新撰六帖

夏引の山松描嘆や事越しよ
あ。ら。の。山。松。描。嘆。や。事。越。し。よ

排。実。花。の。ぬ。え。や。ま。の。花。名。極。賀
詩。 柘。榴。五。字。對。句。 同上

新枝含淺緑 露色珠簾映
カウ。フ。の。浅。緑。露。色。珠。簾。映

脱萼散輕紅 香風粉壁透
カウ。フ。の。散。輕。紅。香。風。粉。壁。透

詩。 柘。榴。七。字。對。句。 詩。礎

風枝舞腰香不盡 不及春
カウ。フ。の。舞。腰。香。不。盡。不。及。春

露銷粧臉波初乾 落絳英
カウ。フ。の。粧。臉。波。初。乾。落。絳。英

眉黛集將萱艸色 度隙風
カウ。フ。の。眉。黛。集。將。萱。艸。色。度。隙。風

紅裙妬殺石榴花 春閨空
カウ。フ。の。紅。裙。妬。殺。石。榴。花。春。閨。空

詩。 柘。榴。之。詞。 白。樂。天
暉々復煌々花中無此芳
ソ。ラ。キ。ラ。く。ト。見。コ。ト。ニ。サ。ク。此。花。ニ

カヤウナケシキハ思イガケナキコトノ
ヤウニオモ
ワルハトナリ 艶妖宜小院修短
稱低廊 ニウイナ花ノイロハニヤシキニ
ヨクウツルナガイエダモニ
イエダモヒクイカキニトリ
アヒヨクサイテアレ

女貞 ○貞木△隸 五月細白花開く葉ハ

椿 似てきざら 故に娘つづき
又ハ△ヤス椿と云 葉ハ四月草木
出ニ三ツ四合出ス

繭樹 四五月の頃白花を開く
葉ハ女貞に似てく

光 あり四時凋す寸只二三分
落葉を 三ツ四合此木の皮を取

てハ 白くは 故に娘つづき
夫木 君とて 石の形 樹の

南天花 南天燭 南燭 男嶺
染菽 楊烟 牛筋

栗花 花青黄 排照んそを養
似てく栗の花扇竹

辟盜賊法 戸の尻ノ木
以栗と用まハ盜賊入らす 杜

鶉花 さつと種類をまりど
其中ハ木とて賞する

雪 神樂岡 小つたを 人九等ハ

△五月躑躅とも書く今ハ

は り 石巖花 花



合歡花 合昏 夜合
青裳 萌葛

○花上ハ半白く下半紅る葉
ハ緑めで夜ハ合す

○人家ふうして人そと怒らさ
らし合歡ハ怒りと除と萱州

主葉ナリ 万葉 紀女郎
君のこみんやとけさふ

貞應二年百首 為家

秋といへるうね花ありぬ孫むけ木の
神くまて及月とんをある月と并

能 花の多用の
非 花の心油徳
花 今の世
小用の

さうたよの花ありりとも此木の
色と説あり○三才圖會ふの神を

坂樹とかく花の白く火さき
実へむま生まきく熟る紅
百合

強瞿。重箱。夫木。西行
言云雀上るあ田はする娘やうの
何よつくともるをこ我やうる

詞 夏の野。庭の面。あけふ
さけら。あつ田あつ

連 花のめりぬらうとて花はさき
車百合 車の輪のごとく花ひ
らまはつて横小垂

日光の産い黄いろ
大峯より出るの赤
姫百

合 山丹。百合に似て
花も葉も小



葉へ柳小似らう花赤
夫木 土御門院

庭の面は去るさうらう夏は月よ
ひらりあきね娘百合乃に

連 花のめりぬらうとて花はさき
狂 深草小咲まらうとて花ゆるい

小形小剛の地
子であらう花赤
兒山丹

開花小さく愛を
べー江戸より出つ
唐山丹

赤花びら厚く薄
さめと緋百合と云
袂山丹

白く葩厚く本琉球より来
る深山の間繩ふさがりて是を
取得て袂に入きて
鬼百合

帰る依て此名あり

卷丹。花赤く六弁
黒点あり山丹より大

狂 花のめりぬらうとて花はさき
香の成りしり鬼百合の花故

五ヶ花六

葵 花の大で錢の大さのう
白赤二種あり開きて久し

龍葵 莖葉のつゝ小似
て実ハ茄子に似

似たり其始青く熟する時黒
く或熟と赤き物と龍珠といふ

萱草花  忘憂鹿
鈕

黄赤百合に似たり住吉の景物
かり 夫木 為相

下細まはせをさるまゝのう
くろふらまぬ人のみりも少

俳 忘憂の花と身や思ふ若の来山
花の

詩 萱草文詞 唐 李咸用

芳艸比君子 詩經ニ 詩人
見たり

情有由 是ハヨシ 祇應憐雅態
ナルヲ愛シテ憂ヲ

味必解 忘憂 花兼ノ風流温雅

忘ルト云コトハ解 積雨蒨庭小
スルニハオヨバヌ

微風鮮 砒 柔 雨ツキニテ蒨草
レダリハハ風ツヨキ


柔滑ナリ 莫言開太晚 猶
花ノ晚キヲ処ロメ玉フナ

勝菊花秋 菊花ハ秋ノホニヒラク
ソレカラ見レバ
早シトナリ

下毛花 繡線箱 ぶらう
の葉に似て小

花をのろく 金盞草 花黄之白
淡赤色あり

金錢花 花紅み 金銀

花  忍冬の花之黄白
交咲く故に名づく

俳 金銀花に似たり 夏菊
たふしし地うを利貞

種類中多し異名秋菊の所あり
夏菊は伝金盞草の種 宗節

茴香

色薄黄



時計草



威靈仙

花淡紫

鼠李

鳥糞子
牛李

美容柳

金線桃
赤央柳

花黄
きり

治積瘕法

九州大祿の諸士

平素積を憂ふ死に至り其子小遺をばりて死せば腹をこき積と見て何もの相とす是を見よと命を子遺命とだしがくよと許へ腹をこき果して積塊あり甚どかた利刀をくも刺しあつて種種の菜物を以てそげ共る変せど其中一人楊枝を以て飯初より其まじらふとふ是びやう柳を作る楊枝

故は右柳の葉を煎してそぎく其積塊たりまら消滅と云り

酢漿草花

一名酸母。片葉三つあり故かこをこ

蛇林子

異名 牆靡。蛇木。粟。蝮。馬林。花白く積

蛇喜んで此草の下は其実を食ふゆへ名つと

戴菜花

異名 菹菜。魚鱈草。花四葉以て白葉鱈

草石蠶

異名 取。土。蛹。滴露。地瓜兒。五月

根と堀り蒸し煮て喰ふ味百合のこく根老蠶の故名

援藪花

名びつむら。花黄

蔓ふ似て強く刺あり葉馬の蹄のふくくして光沢あり秋黄

花をひくくとして。俳諧の李は古来より夏とする故爰は出す

天南星花

一名虎掌。如石

苔花

一名地衣草。淋雨の
時花の形のこけ物也

生じ是を苔の花といふなり
種類。石菖の草花まきのじ

井中苔のき井の中又生す
垣衣にれ垣の北陸に生じ

ののまり又石上に生じり
昔那と名づく一名烏韭又屋

上生じり者屋邊又瓦松
一吹葉何草といふ玉柏石

生じり松の
おく紫色なり 朝菊 四月
五月

の内紫碧色の花といふなり
朝開と暮ると名づく故に名づく

豌豆引

一名胡豆。胡戒又翻
檄。花の形蛾のじ

蠶豆引

其莢上は向ふ故に名
づくひくと名づく

花且見

蕨のこゝの花なり
うるあもの事ともいふ

万葉物語にさくさくふあつた
くまのつてもまぬぬもすうらも

花菖蒲

花葉かまつたこ小以て
紫白飛入種なり

菖蒲

軒まづけつもの泥
菖蒲なり石菖蒲

小葉なり盆中ふうへて受す
蒼く奇なりいづれも泥とこの

やめくよめり茶とすなり石菖
根より根の長き菖蒲として長き

根とよめり委しく九丁目に有
年中行り 経賢僧部

みさめまのためとるあやめ茶
むのけつさもあひしらん

家集 雨中菖蒲 法性寺入道
雨ふきいよとそつるあやめ茶

白川殿 菖蒲
ふりのねはまのふりぬる

五月 草木

あや免もつらふみ月海の江

草庵 水辺菖蒲 頓阿

きふりる松かろふ秋の松とひて
あや免そまける庭の池あり

○江戸菖蒲と献せしき 秋
進上水邊菖蒲

千年五月五日大江御殿

皆人よと得てはと師頼卿と
まじりたりとを

詞はあ池のあやふ風かほる。

みよりすじくまきりあふいそ
ふとせ。年のおきく自。あや免の

櫻を勢ふと人部云のあやめ
の樹とあやるとして唱。笑。定。清。深。

小冊と多田池。然川。生。歌

△高蒲つえ。はくろく。あ。の。こ。九。丁。以。か。あ。う。

連。り。枕。後。す。け。ふ。句。ふ。あ。め。り。小。牡丹。花。

入。る。の。小。家。も。じ。に。あ。あ。あ。か。紹。巴。

俳。句。門。も。た。た。り。け。り。あ。あ。あ。十。十。

い。花。あ。あ。機。も。あ。る。風。々。各。其。角。

狂。皆。人。の。こ。ろ。ふ。こ。ろ。は。の。花。あ。や。り
吟。は。あ。の。水。ど。い。れ。の。常。楽。養。

雪下 虎耳草。石荷。夏花有季冬

朝露草 銀銭花。楮ふ似。て白青うろこあり

底黒紅のこほりあり葉三出五出
あり西瓜の葉ふ似たり高さ

二尺そろう枝あり朝又
ひらきゆみべは萎むなり

長根草 江蒲草。石龍菊切。○すくみ生がまに

穂のどしれ 蚊帳釣草 草 花

小花さく 草

木の類よりがまの葉に似て其
らこ三つどあり花薄あか

玄及 五味子。花黄。白紀州の産は

萍花 藤 出る春より 為家

入るに任じやるとるんは海ノ乃
傍りも出る多中川のゆ

①非 うたまママあさひ
あらねるよ嘆こ由 **藻花** 馬
藻

水蘊 △藻こゆ △藻川舟
①夫木 貫之

つりかもし今日て言くと花を川
あつれてよくまるとりうん

①連 花不採わらふと出らふ原が細巴
①非 池を名い出画あふれを望嵐雪

①蘭 花や金魚は **鉄線花**
くさへよまされ其角

二月 苗宿根より生む
四五月花咲くよりほふ

こまごつと一故は名づき
詩 **鉄線花之詞** 賈昌期

披雲似有凌雲志 サキ出タル
ケレキ出世

①心 日ニムカイテ花ノツカヘ
①心 ヤマフテノ心テアラウ **珍重青**

見ヘルカ 向日寧無捧日

カ、リ 直從平地起千尋雲
タルク 直從平地起千尋雲
テ松ニヨリテ高クホリエタツ

松好依托 ツルクサナハヒトリノラ
ルコアタワズ松ノ木ニイ

撫子 △瞿麥。遠麥
○南天草。天菊

大蘭。巨句麥。洛陽花。よびは中
○まろ中△石竹△常夏へあてこ此三

品同種今分けて二種とす花
びの免がうきまみ有て切しと

あるものそまでしこと一切たる
まみさりのそ石竹と名づくる

○葉は用る瞿麥△かりほじて
或りのせれちくとつりゆの花色

薄紅るり△倭撫子葉葉かり
めく花紅紫白單葉千葉數種

めり△藤撫子葉ふとく葉あま
たれちひさく貞拈梗は似て白

紫と帯る○阿蘭陀石竹葉株
ふとく葉こく花も又さかして

大輪多し。○京撫子株らくき並
ふくく葉あなとより大きく花一
重紅なり。其外数十品あり

◎家集

俊頼

君う代のたきよひうし春日祥の
つれ弁にも花されみけり

久安百首

俊成

庭の面のき地り上のあしき
ちとよふあけらとこのあしき

拾玉

久愛瞿麥

慈鎮

ふりこはつれぬさふをあそ
おる文あふうららひは

家集

瞿麥夾木

仲正

夏草の下初水ころをちりて
ふくうふ候大和までして

家集

瞿麥滿庭

清輔

庭の面のうら撫子のくれさめ
ふくく入庭さるふりぬ

天木

夜思撫子

白く入のあけかきわくふくそ
あふくこはちやねわゆ

詞

嘆息。白く。らる。か。輝。つら。く。

ほげ。垣根日くを。まけみ。が。中。

嘆息。さ。葉。床。く。い。う。う。り。

と。む。べ。し。ら。う。打。さ。ふ。を。を。

よ。む。を。し。妹。い。け。く。我。あ。う。こ。

こ。さ。の。の。を。く。よ。あ。う。り。紅。を。

か。う。れ。あ。井。日。く。し。の。を。く。

大。和。な。を。し。こ。あ。ふ。り。

こ。は。子。い。よ。そ。う。あ。か。き。か。て

し。こ。お。ほ。し。ら。う。い。し。あ。あ。

あ。あ。と。あ。あ。の。あ。い。と。あ。う。

大。和。撫。子。か。い。撫。子。あ。れ。撫。子。を。う。

あ。う。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。う。と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

狂かすろを四八あいのわゆるの
あつらふ人よる此このふか行風
あふまう長風引くやきてこの
鼻をくしくとるるおけゆ 合

詩 瞿麥之詞 唐 司空曙

一自幽山別相逢此寺中

一ハカタ幽山ニテ見テカラニタ
此寺テオホクノ花ヲ見ルゾ 高低

俱出葉深淺不分叢

ト野蝶難争白庭榴暗讓

紅白キ花紅ノ花外ノモ誰憐芳

草色春露到秋風花ノウツク
レキヲ賣

田植早苗取。苗の長七ハ

早苗早苗さるももももももも

非合羽着て友とあそぶももも其角

早乙女女の苗を植ふ云非乙女

のよこれぬ顔の朝斗其角

田歌苗とさゆり時声とあけ歌風

非乙女のあは止まらぬ其角

田草取苗とさゆり十四五日

見えきれぬ草の根土中よこび

くわい早く芸ふかきりくわい

そくそくたまり草の根をひこり

苗とさゆり十四五日にて草と

報其後ヤクそまら草とさゆり

報鋤くころの季は六月とす

新撰六帖 知家

あひのどろまもつ穂をたはらぬ

非乙女とさゆり其角

早苗若苗△玉苗○初かん

四月を多五月すまは苗とさゆり

日程して八九すより一尺を成ると云

五月廿六 夫木 人丸

あまのつりいふ面の小田ふねおれ
富貴のらま面よりつづき

家集 取早苗圃公 西行

やまのきき言ゆ極女のまをよめて
心面のこころへもよめてかゝる

兼久五十首 早苗多 定家

らんらんすまのりのまへにま
ぬくのこころまのねどもさか

夫木 採早苗 為家

とよまふさうともまふま
こころのらまへまをよめて

寛元奇合 社邊早苗 知家

まのまのれたるまをよめて
おん人のまをよめて

建保奇合 夕早苗 範宗

とくおのまをよめて
まへよりこそまをよめて

家集 雨後早苗 仲正

まをよめて
まをよめて

常盤井百首 門田早苗 仲正

まをよめて
まをよめて

かじりたるまをよめて
ついでにまをよめて

詞 裾井小田 志免繩 ぬまそへ被

小山田 懐 ぬまの 谷川 置 ぬま

志免 ぬま ぬまの まをよめて

父町田 懐の男 ぬまの 青田

運 早苗 ぬまの 民の まをよめて

ぬまの まをよめて ぬまの まをよめて

狂 ぬまの まをよめて ぬまの まをよめて

ぬまの まをよめて ぬまの まをよめて

六月 菱の花 所よ委

若竹 今 年竹 新竹

長ク 高ク 故 多計と名づく又

此君と云 夫木

批 君と云 夫木

子代のちがや今のまをよめて

〔連〕花さる竹ふもつちひる葉い 赤紙

〔非〕美竹や鞍ふりあるお根山 其須

〔美〕竹や雪のまきいまごふは 乙由

〔美〕弁のうしやたたく雀うも 龜洞

○竹をうゆる竹解日ふかごうす

正月朔日二月二日十二月十二日小

うゆべし雨後うゆ色い活し安し

○信濃小竹をーあはれも竹條竹の

るり正月小松をう

立て竹いかざりす

細長く節ひましくて

直ちり矢竹不用ゆ

雄竹の如く節い雌竹ふ似しう

女竹男竹の見分るさゆ人業平と云

観音竹 葉短くは

志き竹

かま竹 布袋竹 太さかく竹く

れ如く 節れつてはま

アそ作り

竹の皮散 季に

用ひきくく次竹の皮しるい

六月の季とす竹の皮と

艾 異名 氷基 黄草 鑿草

白蒿 艾刈 ちんちん

むかりして一季なり

〔分〕世の中は麻の弦かくあるも

りしんの中は巻はきりして時頼

○俗艾蓬の字を書き蓬ハ惣名

種類多し千年艾 ちんちん

草花蒿 白蒿 角蒿 等あり

真菰 異名 艾草 蔣草

はこもくと斗の雑草

○古代儀も作る今稲蒿を以て

作る物をもさしつゝは是はよる

真い葉の詞とよれささくつゝん

○今ちまごいしんくものさう

○奥

州よひむら 昔蒲をう 端午小

これ軒ふ世目もと

〔分〕古今 貫之

美菰うる波の辺あり雨姫さる

はひよりこゝろまごころけい
俳句 初日教を蔬いあはれをいふ身素

石苜

能 名高のゆふぐれ
白く白く二那 秋竹

和布刈

正字石葺 〇紀州
加田より出るといふ

の類なり

海帶刈
の類なり

こかえの對ふよりて名づく
ふるまう刈のりさるるなり

李子

名 異 嘉慶子 明李 来南
居陵 迦 沈朱實

詩 李之詞

唐 李峤

潘岳間居日

潘岳字安仁ト
イフ此故事文選ニ

代ノ人ニ

王戎

戲陌辰 王戎が
事下ノ

故事

蝶遊

芳徑 馥 芳徑ハ花
ノ咲ク徑

バタカウバ

鶯轉

弱枝 新 弱枝ハ
カヨハキ

技ノ

葉暗

青房 晚 青房ハフ
サナリノ季

ノ突コノトキ葉々々
レグリノスナリ 花明 玉井春

李花ハスレテ鮮明ニ
シテ 透徹ルナリ 方知有靈

幹 李樹ノミキニハ神
冥ノキハメテアリ 時 用表眞

人 〇ソレユヘ李ヲ神仙ノ
人ニタトヘタリ

李 晋ノ王戎七歳ノ時
諸ノ小兒ト道傍ノ

李ノ樹ノ下ニテ遊ブ李子ノ多
キヲ見テ枝ヲ折ル小兒競ニ

我先ニト拾ヒ取ル中ニ王戎ハカリ
取ラントモセス人ツノ故ヲ問フ王戎

ガ云ク路傍ニアル李ニテ人モ取
ズレテ然モ子ノ多ナルハ必ず苦キ

李ニテアラン此故ニ我ハ取ラスト
答フ果シテツノ李苦クシテツ

モ食レザリシト 李ノ肉
世説ニ見ヘタリ 厚アシ

テ核ノナキハ龍ノ耳ヲ割ル
其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト

イハ 鑽核 王安豊好李ノ木ヲ
持テ價貴ク賣ル

他人ツノ種ヲ植ニ事ヲオワレ
テコトククツノ核ヲ鑽タリトシ

李接法 桃木小を多く枝と
は帝を突くらぬのめでたし

楊梅 (異名) 杓子 聖僧やまじ
紅白紫の三種あり泉

剛大義 生どりの尤佳
能中よりふつる馬は経の馬永我

詩 楊梅五字對句

冬花採 盧橘
冬ハ橘ノ実ヲ花
ニタトヘテトリシゾ

夏菓摘 楊梅
夏ハフセモノニシク物
ナキヨツテツミトルナリ

詩 全七字對句

詩 礎

樓閣兩山 搖碧落
コブホレニ
嬌暮春
ハルノスセサク

楊梅千 礪瀉紅泉
イワテインハナ
一庭花
ニハニヒラク

高林帶雨 楊梅熟 故園春
コキヤウハナ

山岸籠雲 謝豹啼 帶雨閑
オビテアムテ
ハルニ

詩 楊梅之詞 唐 李嶠

折來鶴頂 紅猶濕 揚梅ハヨ
ク冥雀ノ

丹頂ニ 宛破龍睛 血未乾 神
ノヒトニニモ
若使太真知 此
ノトヘタリ

味 揚貴妃ガ此揚梅
上美味ヲ知ルナラバ
荔枝馬

得到長安 荔枝ハ長安ノミヤニ
到着スル事ハアルニ

及荔枝揚梅ヨク似タリ

氣條挑 あくの糸子を根
をひの実多く大い

無花果 映日菓 優曇曇花
花をくして実あり

初青く 熟れば 紫黒色 味甘
淡 〇 涅槃經云く 佛出世

楊梅

鳥雲花の喩へて稀なる事
に即ち無花果の事なり

千年の一度花を開くこと
の安んずるに玉椿をさみぐ

君の代は百回も咲く
優言をたのむ **天仙菓**

和州山中ふり花をくると実
をむくば枇杷に似て小づい小

見好ん **枇杷** **非** 氣のたまり
で食ふ **枇杷** **枇杷** **枇杷**

光廣卿 **毒虫** 枇杷の治法
枇杷の核を甜くしてこれを

はくまをいふ頃み治す

詩 **枇杷** 五字對句

楊柳枝々弱 **嫋々碧海風**

枇杷 樹々香 **濛々緑枝香**

詩 全七字對句 詩礎

回首桃李都無色 **對春溪**

喚得芙蓉不是花 **正滿林**

万里青障蜀門口 **味尚酸**

千樹紅花山頂頭 **溪水流**

青梅 **干梅** **干梅** **干梅**

連 青梅の糸をよめてはくると

非 嬌さいなをれ梅の二ツりる社園

狂 喜梅をよめてはくるとはくると

詩 青梅之詞

天賜胭脂一抹腮 **胭脂** **紅**

り盤中磊落笛中哀 **落梅**

イフ笛ノ **雖然** **未得** **和** **楚** **俱**

五月 梅 七

鹽毒和羨ノコト書經ニ見ヘタリ曾喚將軍止

渴來毒酸ノ渴ヲヤメナリ將軍ハ昔操ノコト

羅隱

杏子甜梅。りんごの味甘く梅ふびの酸根のめ

これものる石を根ニ置

櫻桃紅色。うらと朱櫻は紫色細黄点あるもの紫櫻と

名づく味尤美之黄さると蠟櫻と

○中夏天子は含桃さくらをさむといふ事あり礼記に出さう

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官御殿ニ官人ヲ集メ

會宴禁朱桃出上蘭庭

エテ櫻桃纔是寢園春薦後

春薦先祖ヲ非關苑苑鳥御

殘春薦ノヒモロギニシテ帝鞍競

帶青絲籠退出ノキ并領セシ

中使頻傾赤玉盤テツカハス

飽食不須愁内熱ハ内熱ヲヤ

大官還有蔗漿寒位

ノ官人ハアトデヒヤリト

桑實正字青小袖音く

薑註こたの冷ひを合ふは唯正

生胡桃新撰六帖女かくは

早松茸五月出るを

光俊

四五五月雨後生ると早初と云
排風堂のそや杖とぞ早初事風神

瓜加子 異名 崑崙瓜 草薺甲
俗諺ふ秋茄子嫁小人の

色もこいふこいひあへはうい
いはくうい事や万葉集示

の中いこいひ

秋茄子まじりてけりこいひを
始まらんれど棚おそくを

非 ちやうど別よ茄子味よの味
をのあつたをのさししこれの

初茄子 異名 新茄 和系茄
水茄 早く出るもの

非 一日ふ二つ愛さう初茄子一池
ぬみそをさうとわらん瓜あま晋子

瓜の花 甜瓜 越瓜 姬瓜 浅瓜 胡瓜
瓜 胡瓜とて花咲

瓜 瓜実の所はらうくまます
非 夕方には朝ふもは守瓜の花芭蕉

早瓜
瓜乃瓜乃瓜支考

浅瓜 白瓜 干瓜 青瓜
夫木 定頼

瓜のこころの瓜はく瓜はく
こぬりともみりぞおぬり

狂 瓜をこころの瓜はく瓜はく
瓜はくこころの瓜はく瓜はく

胡瓜 黄瓜 祇園の氏子これ
を食ふ事と忌む愚

瓜の形かて織田氏の印なり
信長祇園と再興して自己の紋

と社に付られりて神社の紋ありて

姫瓜 色白く其さゆへ姫瓜と云
小児習目と画く玩具と

瓜に似たる鬼のくちくち
瓜に似たる鬼のくちくち

狂 娘うらみのるる瓜なり
茶かくれりる瓜乃丸丸

出行作事 西北の方ふ高の
てより今月

天道西北より 樂事 月令より
行が文あり

月や高眺る居るへ一遠と
眺望より山林遊ぶべし

あり夏山のけき草木や
さるまげり青きとくくく

うらひのいまだあつともはのみ
あふくはよ至くぞ日ハ長く

變るへ一〇早蕨もあつても
り一〇螢見諸神諸社のけい

を〇五月雨をいんとくくく
てまのあつちる同し心の友ど

ちあつちるあひ書ふと見ふ見
あよみさたのいかり屋

天氣 此月袍雲起るは舟人
くはをさくふ是暴風

稲豆宜し一〇當月不熱十一月
不凍〇月内寒々れは早ハ北へ

養生 今月以後天氣熱する
漸々るり謹んで風

地は卧し生冷の物を食とべ
くは是をまをせ悪疾癰疽を

生と〇此月屋根より上る事と
忌む精神と脱と〇滋味と薄

く一和と極る事さうれ替欲
と節より一天樞中腕は灸と

大暑のくえよあつちり保養
とく一精氣を放散せしむ

ゆるくは保養とべ一遠望
とへ一高明は居とべ

衣服 當月四日まで 袷を着す
五月より 帷を着す 袴淺黄

女衣服 四日まで 袷を着
とる男子と同 時

衣 菅蒲衣 表白裏紅 杜若
衣 紅黄ぬる 棟衣 表白裏青

夏月衣服の儼と去る法 然る
の汁のひくし洗へ能あると

又法 枇杷の核を細末して
 へそよく去るるなり 又法 梅の
 葉を煎じて洗ひてす

青梅枝葉ともふ久しく貯るる法
 青梅の枝折を葉も実も藁
 として水漬し醋と出し其醋
 一外以寒の水一外二合和して
 漬し一外入用の時とり出し水
 以生るる一葉も実もやうど
 てよく持つ 烏梅と製する法

青梅をとり皮とくぐり核と去り
 かごふ入火上かへり置いて後を
 用也 年中青梅を貯る法 青竹
 を二つ小割り青梅と入し其の如
 く合せ藁こそくく其上を山土
 へて塗りあめ地を掘りて埋め置
 べー来年もぞも損せぬて持つ
 用る時の竹を引とり入用を取
 りの如く埋め置べー

五月飲食料理献立

好温暖の物を食ふべし此月
 物腹中却て冷物よむかざば
 禁冷物及び生瓜蜂蜜と忌む
 物○びとと焼肴一時小食かへる
 谷川の停水を飲べく才魚鱈
 のよれ水はあり是との病癒とる

料理 汁 竹の子 丸いさ とうろくたきき

たい けつし房 清汁 ちんぽん

塩いなり 鱈 たい 赤貝 白うなぎ

ままぐつね 抽 ちんぽん

差味 ねま ちんぽん

煮物 ちんぽん けつし房

竹の子

ヤミの子
さかすか

吸物 たつぎ
あつぎ

小やい
まそ

うづら
まそ

青豆
和

會物

きんぎょ
あへ

あへ
あへ

小あひ
あへ

あへ
あへ

あへ
あへ

精汁

あへ
あへ

あへ
あへ

ろ豆
ふさ

清汁

清汁
あへ

膾

あへ
あへ

あへ
あへ

差味

あへ
あへ

あへ
あへ

煮物

あへ
あへ

あへ
あへ

わん豆
あへ

和會物

あへ
あへ

かいご
あへ

牛房小呂

吸りの

あへ
あへ

あへ
あへ

あへ
あへ

五月用意の品 左

生薑法 籠の前の土とふく
堀と底はあつぎとてしき其

上は生薑を置る土とあつぎ
てより久しをたたくるるる

生笋貯法 生笋を桶に入ると
して河瀬のまき所を埋つる

石と重し次かき置へり追も
生して能くあつぎをりしうと生笋

のえ貯へやうも右も同一
薑塩漬法 薑をよれ

梅酢を漬へり漬ると茶と
少し縮切はくも底へ入置

べいかくのくもれが一年を経

てし 櫻 三 次

魚 玉 子 塩 法

極暑の時魚を三枚はちろい大

鉢に水一盃入置きて塩を入ふ

るり其後玉子を入れて見ふべし

玉子沈むるなり又塩を入る

かあるべしけし玉子うら物に

このかけんびて魚よくたまり

物也 梅酒の方 古酒 一斗 梅 三

砂糖 右梅少くも瓶のふたを

見て花のこぼれをとり 飯粒にして

一夜灰汁ふ漬洗ひ水氣をぬぐい

酒へ入ふなり 飯の饅ごり法

蕨の葉と飯の上ふかき一夜

を経てもよくとす 生魚と

貯ふる法 鯔鮓の粉をふひて

其中小魚をはきみ油を入れ置

い損らる事あり 又方 寒

中の雪水まひじおけハス

々損ヤ

五月部終



